

目 介 祐



大田ゆうすけ No.15
(福山市議会議員)

ふくやま競馬 存亡の危機

現在の緑町公園に福山歩兵第41連隊があった頃、年に一度の一般開放の日があったそうだ。「軍旗祭」には多くの一般市民が訪れて、将兵達との交流を深めた。最大のイベントは軍用馬を使った競馬であり、年配者の中には未だに当手を懐かしむ方がいらっしやる。思いおこせば、はるか戦国時代より武人と馬は切っても切れない関係であったし、農家にとっても農耕の主力は牛馬であり、まさに家族の一員であった。

戦後、モーターリゼーションの進展や農業の機械化により、馬は競馬場でしか見るこゝろがなくなつた。私は競馬場近くの沖野上町で育ち、多治米小学校に通つたが、競馬場の外を散歩する馬を追いかけて、同級生を訪ねて場内に入り込んで遊んだものだ。馬の持つ魅力は犬や猫など遠く及ばないのではないか。30年前の最盛期、競馬開催日には周辺は車と人であふれ、年

間の売上は300億円を超えた。累計400億円を超える一般会計への繰り入れを果たし、学校等の多くの公共施設建設に充当された。福山市の戦後復興に多大な貢献をしたが、いつの頃からか競馬は単なるギャンブルと捉えられ、周辺は刑務所のような高い塀で囲われ、臭いを出す迷惑施設として位置づけられた。

競馬事業は18億円余の累積赤字を抱えているが、1000億円を超える下水道事業債と比較すれば微々たる額ではないかという気もする。しかし、単年度収支均衡という至上命題がある以上、これ以上の赤字を垂れ流すわけにもいかない。唯一の望みであったインターネットによる馬券販売も売上全体の底上げとはならず、今年度上半期の赤字はすでに2000万円を超え、施設も老朽化し、来年度予算の編成は困難として事業廃止の見込みが濃厚だ。

長きにわたり続いた馬と人間の共存共栄文化が今まさに閉じられようとしている。市長、議会、関係者一同、一つの歴史を断絶させるといふ覚悟をもって対処する必要がある。市民の皆様も今一度競馬場にお越しいただき、最後の一言を咲かせてほしい。